

“農と食” 北の大地から

連載50回 特別インタビュー

副知事を退任後、果樹農家へと転身した

麻田信二さん

聞き手

ルポライター
滝川 康治

輸入品と同じものは作らず、 北海道は消費者が本当に食べ たいものを創る大地にしよう

北海道庁の農政畑を長く歩き、昨年春に任期途中で副知事を退任した麻田信二さんは、ブルーベリーなどを栽培する果樹農家へと転身した。退職後に天下りする道幹部も多いなか、さわやかな「定年帰農」の選択といえる。長沼町の自宅を訪れ、有機農業の課題や在来種の保存、オーストラリアとの経済連携協定、酪農のあり方などについて意見を聞いた。「海外の農畜産物に左右されない消費者と直接結びついた農業」を北海道で創ってほしいというのが、その主張の核心である。



あさだ・しんじ 1947年、網走市の畜産農家に生まれる。北大農学部農芸化学科を卒業して民間会社に勤務後、74年に道庁へ。農政畑が長く、酪農畜産課長などをへて農政部長を歴任。2004年には副知事となるが、任期途中の06年3月に退任し、長沼町内で果樹園づくりに励む。2.2haの農地にブルーベリーを中心に栽培中。「農業にとって大事なことは技術よりも哲学」が持論で、二宮尊徳の思想に共鳴している。

小果樹を植え農園づくり 自由自在な長沼の生活

道庁の農政課長をやっていた八年ほど前に麻田さんから「いずれ農業をやるか」と聞かされた。聞いてはいたが、なせ、どうした生活をしようかと考えたんです。

パブル経済が弾け、二十五五年ほどの間に日本中がどんどん悪くなっている気がするんです。以前は「働きすぎだ」「心の豊かさが大事」と言われましたが、最近逆は労働時間が増え、格差社会が広がっていますよ。僕は公務員生活をしながら、「こういう社会は良くないなあ」と感じていた。じゃ、どうすればいいのかわ。北海道であれば、農業がきちんと土台になった社会を創っていくことじゃないかと思いついた。ずっと農政の仕事に携わってきたんです。

僕は、年を取ったとき安心して暮らせる、セーフティネットが確立されている社会が一番理想だと思うんです。そんな社会ができれば、子どもたちや若者も夢を持っていろんなことに挑戦できる。でも、農業はどんどん担い手が減ってしまい、将来は惨憺たる状況なわけです。北海道全体にもいえますが、農村地域の人口が減り始め、高齢化していくスピードはものすごく速い。十年、二十年先をどうするか。どうするか。

一部はそうですね。向こうに加工室があります。僕は、草刈りや苗を植えたり、手入れをしたり。ブルーベリーの他には、アロニアやハスカップ、プルーン、リンゴ、サクランボ、ブドウ……と、いろんなものを植えています。

副知事の任期途中で辞めて、こうした生き方を選んで満足していますか？もう、十分満足しています。自由自在ですよ。元気なうちは農業をできますからね。

有機農業の発展のカギは 生産者と消費者との交流

議員立法による「有機農業の推進に関する法律」が最近、成立しました。法制化を求める声は有機農業関係者の間にずっとありましたが、議員立法によって、ようやく国レベルでも推進策が動き出したわけですね。

国会議員が超党派で取りくんだのが、こうした形で政治が動かないと農水省の事務レベルだと全然動きませんからね。（議員たちが）しっかり法律を作ったのは一歩前進で、いいことです。

ないかとお話していましたが、十年あまり前、道立中央農業試験場（長沼町）の部長だった相馬先生とご縁がきっかけで、ここにこの近所の農家を紹介してくれました。その人が熱心にいろんな形で助けてくれ、お世話になりました。その農家に惚れたようなものです。

「確か最初は、奥さんの名義で土地を買われて、準備してきたんだよね。そうです。今年（06年）の賞状で十一年目になります。

——二三年前にブルーベリーを何百本も植えた、と聞きましたが……

最初に植えたのはもう収穫できます。少しずつ増やしてきました。今年も毎日仕事ができるので、だいぶ植えました。三年計画くらいで、ちゃんとした農園にしたいな、と思っただけ。ここは、すごく景色も良く、ほんとにいいところですよ。（まわりの農家は）ほとんど後継者がいないので、札幌で仕事を終えた人はぜひ長沼に来てほしいな。

——「二三年前にブルーベリーを何百本も植えた、と聞きましたが……」

最初に植えたのはもう収穫できます。少しずつ増やしてきました。今年も毎日仕事ができるので、だいぶ植えました。三年計画くらいで、ちゃんとした農園にしたいな、と思っただけ。ここは、すごく景色も良く、ほんとにいいところですよ。（まわりの農家は）ほとんど後継者がいないので、札幌で仕事を終えた人はぜひ長沼に来てほしいな。



「愛食フェア」の反省点も話し合った「地産地消シンポジウム」(06年11月、札幌市内で)

近代化によって駆逐された 在来種を将来に残そう

麻田さんは「北海道スローフード・フレンズ」の顧問もやっていますね。同会

で進めていくことが必要です。ただ北海道は「自給率二〇〇％」といわれるように、近くに消費者が少ない。そこが取りくみとして少し苦労するところですが、でも、インターネットが発達してネット販売などが出来るようになったので、そういうところに力を入れ、いい物を本当に求める人に提供していくことを、流通という面で進めていっていいのではないかと思います。

「みんなが有機農業になればいい」と思うに至ったきっかけは？

長沼で北海道有機農業研究会の夏の合宿が行なわれて、話をしたり、うちの農園の見学してもらいました。「すべてを有機農業にすべきではないか」と僕は考えていますが、それは理想です。実際には「一歩一歩できることから積み重ね、やっていくことですね。そうでないと持続可能な社会はできないし、規模拡大という形で効率性を求める農業ではダメになっていくと思います。」

退職後、有機農業の集まりで発言されたりしていますね。

特に有機農業に取りくむ人々たちを支援していくべきですね。国民は「本当に安全・安心なものを欲しい」と感じています。有機農業でやるのはなかなか難しい。そこを「国」が支援してくれると、結果として消費者も恩恵に与れるわけですね。法律ができたので、有機農業の仲間と一緒にになり、具体的な中身を政策要求していくといいな、と思います。

国際的な流れのなかで、「北海道や日本はどうか生きていくか？」と考えると、農業をしっかりとしていかなければなりません。今世紀末には環境問題で人類は大変な危機に陥っているかもしれない。「二〇五〇年には九十億人を超える」と言われており、人口増加で食料問題は本当に大丈夫なんだろうか。

僕は生物多様性の喪失が深刻だと思っているんです。一九九三年にFAO(国連)の食糧農業機関が「生物多様性の喪失が将来の食料確保に大きな懸念材料だ。今後三十年間に生物の多様性は四分の一失われるかもしれない」というレポートを出した。栽培している作物や家畜の品種が近代農業によって七五%失われた」ともいいます。そういう面で農業は本当にしっかりとしなければなりません。振り返ってみると、地球の環境破壊は農業をやることから始まったわけですよ。

「有史以来そうですよ。」

農業が発達し、農村が元気になり、エネルギーが都市に行った。でも、その農業が環境破壊をしていくと、地球環境そのものが大変な状況なのに、「食料の確保」「環境を守る」という重たい課題を同時に解決しなければなりません。環境に負荷を与える農業を十年、二十年やっていけばダメになってしまう。だから、有機農業を完全にできないまでも、環境に対する

負荷を抑えた農業をやっていかなければならぬのです。

「成長の限界」といわれて久しいのに、まだ効率性を求めること自体が地球の自殺行為になっているんじゃないか。だからこそ、世界中でスローフード運動が広がり、地産地消も提唱されているわけですね。伝統の食材をきちんと守っていかないと将来、資源を失ってしまふ。

「田園が荒れれば国が減る」と「これまでの流れでいくと、そうした状況がどんどん進むんじゃないですか。農村に働く場を創っていくには、地産地消や有機農業、地場の加工品づくり、農畜産物の付加価値を高めていく」といった、消費者が求める安全・安心なものに比べていかなければなりません。

「法律の施行を機に有機農業を推進するには、行政や農業団体、生産者、消費者はどうすべきか。」と提言ください。

北海道は専業農家が多く、原料生産をして農協に出荷してきたこともあって、国にとっては優等生かも知れませんが、消費者から見れば劣等生なんです。でも「有機農業に転換しよう」と言っても技術もないし、なかなかできない。だから、道立農業試験場で有機農業の試験研究をやって三年目になりますが、これをしっかりと加速していく。

生産者段階では「クリーン農業をスタ

ぶん応援して今年「愛食フェア」が全道各地で開かれました。先日、その催しについて経過発表と意見交換の集まりが札幌であり、取材してみました。各地の報告を聞くと、農協や商工会などがどうも本気になっていない。発表会も支庁職員が報告がほとんど。地産地消はいいことだ！と誰もが言いが、いざ催しをやるに従来の意識が変わっていない。

行政が旗を振ったってダメなんです。行政は動機づけをするだけであって、地域では直売所を盛んにやっているわけ、そこをもっと広げていくべきです。そうしたなかで、地域が工夫して学校給食などで進めていく、いいんじゃないか。

「学校給食に地元の農産物を使う町は増えていますが、年間に数日間しか地域の野菜を使わないところも多い。地元の野菜の流通が良くないんです。農協あたりが地元の給食のために、いろんな野菜を作るくらいのことですべきだと思います。」(行政が)カネをくれないから、「手間がかかる」と「そうした発想では地域は良くならないんじゃないですか。子どもたちの頭のなかに、食べものについてしっかりと入れてもらうことで、郷土を愛する気持ちも生まれるし、誇りを持つようになりませんか。」

「砂川市の学校給食では年に何回か農家の女性グループが造った味噌を使っ



札幌で行なわれた「有機農業フェア」の一コマ。06年12月には法律も施行され、国レベルの推進策も動き出した

ンダードにしよう」といった動きを、農家自身もつと真剣に進めなければなりません。それは農協の姿勢にも求められるし、みんなを取りくんでいかないと、消費者から「ノー」を突きつけられる。消費者、道民の皆さんは、「こういう物を作ってほしい」などと、どんどん発言していくべきです。それと同時に生産者と交流する。

「喧嘩してでもホンネで話さなきゃダメですよ。」

どんな交流を進めて互いを理解し合うことで、生産者には「何をどう作ればいいのか」「売り先はどうなのか」が分かるし、消費者は自分たちの生活が豊かになっていく。そこを人に頼らず、自分たち

ていて、給食時の機子を取材しました。その味噌を使ったメニューのときには、給食を残す割合が全然違うそうです。

「そうだと思いますよ。食べ物の中身には十分気を付けていくべきで、例えば卵だと鶏のエサによってアレルギイが出る、出ないがある。そうしたこともっと注意を払うべきですね。」

消費者と結びつく農業で 国際交渉に左右されぬ道を

「オーストラリアとの経済連携協定(EPA)交渉が近く始まることになりました。協定締結で小麦や牛肉、乳製品、砂糖などの関税が撤廃されると、北海道の農業や関連産業、地域経済に深刻な影響をもたらします。」影響額は一兆三千七百万円に上る「この道の試算結果も示されていますが、こうした状況のなかで北海道農業や食のあり方をどう考えていけばいいでしょうか。」

それは、「農業をどう見るか」に尽きます。出来るだけ自分のところで食べものを確保しようとするのかどうか。なんです。政治家の皆さんは「食料の自給は大事故」と口では言いますが、実際はそうっていないんじゃないですか。

対外的な問題はありますが、「食べものは別なんだ」という意識が必要なん



農業に対する関心が市民の間で静かに高まっている。NPO法人「さっぽろ農学校倶楽部」では農地を借り、野菜づくりを始めた(06年6月、札幌市北区で)

す。それなしに「北海道は大変だから、この品目を除外して」とか、いろんなことをやっていく——そういった国際交渉は時間の問題だと思えますよ。

じゃ、どうするか。そういう動きに左右されない農業を北海道で創るべきです。急にはできませんよ。という方向かという。「消費者と直接結びついた農業」です。現在のような、補助金なしでは成り立たない、国の制度に合わせやっていると農業はなくなるとね。もちろん公的支援も必要ですが、消費者を見て、何をどうやっていくかを考えた農業を構築していくことが大事です。

—その場合、参考になりそうな事例はどんなものがありますか？

各地の直売所がそうですね。また、長沼の駒谷農場では、消費者が「欲しい」という契約の数字だけしか農産物を作付けしません。余計に作らず、畑を休ませたりする。留寿都村には、直売所をやったり、春まき小麦の「ハルユタカ」を作って自分で製粉し、全国に販売する人もいます。そうした人が増えています。それ(消費者と直接結びついた農業)は一朝一夕にはできませんよ。だから、農協あたりがもっと農家が取りくみややすくなるように進めていくべきだ、と思います。

—一口に北海道農業と言っても地域ごとに特徴があります。協定の締結にし

る方式のように大規模にエサを作って、生産を均一化しようとしている。一方で、牛乳の消費が伸びない。だから、僕は違うと思う。消費者は酪農のイメージをどう思っていますか？

—「緑の大地に放牧して」ですね。北海道の草を食べて、牛がお乳を出してくる——そういう牧歌的なイメージを抱いている。でも実際は、消費者が飲みたい牛乳とは逆の方向に行っているわけですよ。そうじゃなく、エサを自分のところで作れば、外にカネを払うことはない。放牧にすると、糞尿処理の施設も少なく済みます。一生畜舎のなかで過ごすのと違い、牛も健康ですよ。タンパク質の高い濃厚飼料を与えなければ、乳量は抑えられるかもしれませんが、牛

ても、十勝のような大規模畑作農業地帯と道央の水田の転作で試行錯誤してきた地域、道東の酪農地帯とは、その影響の度合いは違うのではないかと。

でも、それは時間の問題であって、同じですよ。これまでの流れでいけば、十勝のような農業は一番早くてメダになりま。かつて日本全体で農家は六百万戸ありましたが、現在は四百万戸で三分の一になった。北海道はもっとひどいんですよ。規模拡大で作物を単純化する一方で効率性を求めてきたけれど、どんどん減ってピーク時の四分の一です。それに、六十五歳以上の農家が圧倒的に多く、その人たちは二十年后には八十五歳以上になる。長沼だつて後継者がいるのは一割くらいですよ。そうだったとき一体どうなるのか。府県はまだいいですが、北海道は人口が減り、その土地で農業をやらなくなります。

海外農産物と競合しない もっと多様な北海道農業を

僕は国際的に見たとき、北海道の農業が生きて残る道は(従来とは)違う、と思っっているんですよ。もはや、外国と同じような大豆を作ったりしても勝負にならない。「遺伝子組み換えの大豆を作らせてくれ」「それを輸出しよう」なんて、とんでもない話ですよ(笑)。

—自分が長持ちするわけですよ。いま、二産か三産でどんどん更新されている乳牛が七産、十産になつていけば、生産コストがずつと下がってくる。

—輸入穀物をどんどん食べさせることは北海道の大地を糞まみれにしているわけ、環境に対してもすごい負荷を与えている。「これをずつと続けていくんですか。五十年、百年たつたら大変なことになるよ」と、もっと考え直すべきだと思えます。穀物を減らせば牛乳が余って捨てなくて済む——そういう酪農を創っていくべきです。

—飼料用の穀物も、安など北海道で自給可能な要素があると思えますよ。

人間が生きていくうえで、食べものの確保は一番重要なことなんです。我々

—長沼では「遺伝子組み換え大豆を作ろう」という動きがありましたね。小麦にしても、輸入品と同じものを作つて価格で勝つていくわけがありません。そうじゃなく、「消費者が欲しい大豆や小麦などをどうやっていくか」であり、そこをしっかりとやっていかなければならない。小麦は自給率が一割なので、海外と競合するようなのを作る必要はないんですよ。もっと多様な農業をやつていかなければなりません。

二十数年前にアメリカの農業を見学したとき、「北海道では規模拡大を言っていた。」「北海道では規模拡大を言っていた。」「一ヘクタールにイチゴとナスベリー——それは観光農園で、「生活費の足しにしている」と言っただけですよ。一方の何百ヘクタールもの広い畑は、農産物は安くどうしようもない。

—そういう農業と競争しても、どうにもならないですよ。どんなに助成があつても難しい。でも、北海道の農業の条件は素晴らしいし、日本には一億二千万人いて、北海道がなんぼ作っても食べてくれる人はいっぱいいます。

海外の農産物と競合する品質のものではなく、違うものを作つていこうという、いやなだけです。将来を考えると、食料は絶対に足りないんです。海外からい

は農耕を生み出し安定化させた。そして人間が食べられないものを家畜を通して肉や乳にしてきた。人間と競合するものを家畜に食べさせるのは恐ろしいです。そうじゃなく、地球環境を壊さないで人類が生きていけるような農業を創らなければならなりません。高名な学者が「あと人類は八十年で滅亡する」「二十一世紀に人類は滅亡する」といった本を借

—五年五月にOIE(国際動物保健機関)の総会で国際的な家畜福祉ガイドラインが採択され、現在は飼育に関する基準が検討されています。健康な家畜は良質でおいしい畜産物を供給してくれると旨つと皆さん分かってくれるんですよ。「家畜福祉」という言葉はなかなか理解しにくいようですよ。

消費者は、食べものをすべて他に依存しているわけで、生産の現場からは全く離れてしまっています。でも、「動物から命を頂いている」といったイメージはある。酪農であれば、広々とした大地で牛が草を食んで、元気な牛から出たものを頂いている——そういうイメージなん

—「食と農」北の大地から 麻田信二さんに聞く

つまでも入つてくることはありません。そうしたことを前提にいろんな取りくみをやるといい。

穀物給与を減らし放牧で環境を守る低コスト酪農へ

—牛乳の生産調整が表面化しましたが、酪農のあり方を見直すところまで進んでいません。規模拡大して外国から安い穀物を大量に輸入し、濃厚飼料をどうさりと与えるやり方が主流を占めてきました。そうした時代は長くは続かないでしょう。そんななか、どんな酪農の姿に転換すべきかと考えますか。

やはり自給飼料に依存した酪農をつくるべきです。せつかくの土地があるわけだから、外からも買わないで北海道の酪農をやる。それでは生産量を増やせない」とか言われるかもしれませんが、いいじゃないですか。

—府県の酪農家には比べ難いですね。補助金政策がそれを助長している面もあるんです。TMR(注1)「Total Mixed Ration」の略。穀物や粕類と粗飼料を組みあわせ、高栄養の混合飼料として給与す

たら、「ああ、わたしはそんな飲みたくはないなあ」と感じるでしょう。——そうなりますよ。

—「同じ生き物としておかしんじやないの?」と。命を頂くものを生産するところで、生き物を痛めつけるような飼いや方をするのはおかしいんじゃないか、僕は思う。

—現場を分かってくれる消費者が増えてほしいですね。

—「現場を分かってくれる消費者が増えていく」と思う。家畜は自分たちが生活できている糧ですから、生産者もより動物にとつて生きやすい環境をつくり、やさしい社会をめざす必要がある。そうじゃないと、どんどん極端になり、「食べもの工場」になつてしまふ。そうなることは誰も望んでいませんよ。

団塊世代は農村に飛び込め 若者の就農には積極支援を

—これまでの経験を踏まえ、新規就農をめざす若い人、都市部の年配者や団塊の世代で農業に関心を持つ人たちに對する期待、アドバイスなどを。

農業生産で生活するための収入を得るのは大変なことですよ。よほどしっかりした計画を立てないと出来ないんです。こは十分留意してやつたらいい。団塊の世代が定年後に農業をやるのなら、いろ



きたと思いますよ。
 ——(編集者) 若者が新規就農をするこ
 とは、そんなに難しいですか？

勤めながら農業をやれるといいけれど、収入がなくてボンと入ってきてても、それは難しい。いま、新規就農をしようとするなら、農業法人に勤めて、その近くで場所を見つけてやっていくのが一番いいんじゃないかな。

——(編集者) 跡継ぎがない農家に弟子入りするとか…。

僕は家族農業が理想だと思いますが、一般の株式会社も農業をできるようにしていかないとダメですよ。個人で新規でやるのは、無理じゃないけど、ものすごく難しいですからね。

——(編集者) 女性にも農業の魅力をもっと理解してもらえないと…。

農業は最高ですよ。「人間にとって一番理想なのは農業だ」とルソーが言った。「品格」という言葉が今年の流行語大賞に選ばれましたね。「国家の品格」のなかで著者の藤原正彦さんは、「品格ある国家の指標」として「二つ目に「自給率」を挙げ

ています。二つには「道徳」——日本では武士道ですね。三つ目には「美しい田園」——これは何かといえば、人を育てることと社会を良くするリーダーが育つてくる、ということですよ。

——話は尽きませんが、紙面の制約も

ありますので…。本日はどうもありがとうございました。
 (06年12月19日収録)

インタビューを終えて

わたしが初めて麻田さんと話をしたのは農政課長のとき。「農業はすべて有機農業であるべき」と理想を語り、天下りなぞせず、就農をめざす人物がいることに救われるような気持ちでした。

農業や食の仕事に携わる道庁の幹部職員の方で、「定年帰農」の道を選ぶ人はきわめて少ない。副知事まで上り詰めた麻田さんは、高橋道政に限界を感じたのか任期途中で職を辞し、一介の小果樹農家になった。深いではないか——道職員の方、とわたしは思う。

北海道の「農と食」が抱える諸問題について意見を聞いたが、「消費者と直接結びついた多様な農業」に明日への希望がある、と実感できた。それは、規模拡大とモノカルチャーの道を築進してきた、北海道農業の転換なしに実現できない。

生産者の努力はもちろん、消費者も「安ければいい」式の考え方を根本から変える必要がある。麻田さんには、団塊世代が就農を志すときの先達としてだけでなく、長年の経験を生かしてNPOを創るなどして、「多様な農業」と消費者をつなぐ役割を担ってほしいものだ。

んな農家に行くか教えてくれます。その地域で「農家」とお友達になつていくといいでしょう。土と触れ合っていると健康になりますよ。

——ただ既存農家は、作り方は教えてくれても、農薬や化学肥料をたくさん使うことに慣れているので、それを前提にしてしまふ。そこをどう超えていくのかという課題があります。

ギャップがあるからね。でも、最近では農薬や化学肥料を抑える人も増えていきます。出来ることから楽しんでながらやり、いろんな農家に飛び込んでいくといい。

——農村自体は高齢化していますが、農業をやりたい若い人はけっこういるん

ですよ。全体のなかでは少数派ですが…。

僕は、そうした人たちにもっと公的な支援措置が必要だと思う。いまは、あまりに冷たすぎます。農協も、もっと新規就農者をフォローする取りくみをせひやってほしい。おカネもない、技術も未熟な若い人に「農業をやれ」と言っても、出来ないのが当たり前です。既存の農家、農協がそうした人たちを温かく、最初の三年間くらいはいろんな形でフォローしてあげる仕組みが必要だと思います。

——行政も、その地域の規模がわりと大きな農業のやり方を助けてしまふ。そこを変えてほしいな、と思う。

そうですね。最近、ずいぶん変わつて